

戦後 70 年 —戦争加害国ドイツの話をしよう—

ジャーナリスト
ふくもとまさお

ふくもとまさお

ジャーナリスト、ライター。ドイツ・ベルリン在住。

著書に、「ドイツ・低線量被曝から 28 年—チェルノブイリはおわっていない」、
「小さな革命・東ドイツ市民の体験」（いずれも言叢社刊）など。



■戦後 70 年を迎えるドイツ

ふくもと 皆さんはじめまして、ふくもとまさおです。ジャーナリストをしています。ドイツでの生活が約 30 年と、人生の半分以上となっていました。メンタリティーではすでに日本人ではなくなりつつあり、日本に帰ると「日本人じゃないな。日本人でいられるのはドイツだけかな」と感じています。

今年は、ドイツにとっても「戦後 70 年」の年になります。戦争問題に長く携わり、今年もいろいろと取材をしてきましたので、ドイツが行っていることをお話できる機会があればと思っていたところに、今回こういったチャンスを頂けたことをたいへん嬉しく思っています。

私は「日本がいい、悪い」、「ドイツが正しい、正しくない」と、いい切るつもりはありません。ドイツが戦争加害国として行っていることを皆さんに知って頂き、そこから何か考えて頂いていただくきっかけになればいい。それが、私の基本的な立ち位置です。

■ 1945 年、ベルリン陥落

これは、私が撮った写真です。非常に長閑な農村の風景です。この景色の先にオーデル川があり、今ドイツとポーランドの国境線になっています。写真は、ゼーロウ高地という高台から撮影しました。ここが実は、第二次世界大戦終戦間際にとても大きな戦いのあった拠点なのです。ゼーロウ高地の先にオーデル川があり、ここに国道 1 号線が走っています。この国道がナチスドイツの拠点ベルリンへとつながります。ソ連がポーランド側から侵入してさらにベルリンを落とすには、ここから攻めるのが一番いい場所でした。しかしそのためには、この高台を征圧しなければなりません。同時に、ナチスドイツがそれを阻止するには一番守りやすい場所でした。

ソ連軍がポーランドに侵攻し、1945 年 1 月にはドイツのかなり近くにまで入り込んでいました。ドイツ・プロイセン王国に属するキュストリンという町には昔からドイツ人が住み、ヒトラーはこの町を拠点に何とか

ソ連軍の侵攻を食い止めようと考えていました。そのキュストリンが、2月に包囲されてしまいます。そこからオーデル川を渡れば、ベルリンまではもう約70キロです。ソ連軍は、ゼーロウ高地を越えればベルリンはすぐそこという所までできていました。しかし、この地が高台にあるということがソ連軍にとっては最大の難関でした。ソ連軍は約100万人の兵士を集めていました。それに対し、ドイツ軍はわずか12万人。一番熾烈な戦いのあった4月16日から19日の間に、ソ連軍約3万人、ドイツ軍では約1万2,000人の兵士が戦死しています。さらにソ連軍は、この戦いで戦車2,000台も失いました。

この高台を落とされたドイツ軍は、徐々に後退します。4月25日には、ベルリンが完全に包囲されました。ヒトラーが4月30日に自殺。ヒトラーの遺骸は（ベルリン南西にある）マゲデブルクで焼却された後、内々に埋葬されます。その後、エルベ川に捨てられたともいわれています。

■ゼーロウの戦いが持つ意味

5月8日、ドイツはベルリン郊外のカールスホルストで降伏書に署名しました。降伏書に署名したのはソ連、イギリス、ドイツの元帥で、アメリカ、フランスの元帥が連合軍の証人として副署名しています。正確な署名日時は、1945年5月8日午後11時15分です。しかしその時、ソ連（モスクワ）では既に日付が5月9日になっていました。さらに文書をロシア語に翻訳する時間も必要でした。そのため、ドイツにとって終戦は5月8日ですが、ソ連にとって終戦は5月9日になっています。

この5月8日は、日本にとっても非常に意

味のある日となりました。アメリカが当初原爆を投下しようとしていたのがドイツだったからです。そのドイツが降伏してしまいました。その後の7月17日、ネバダで初の原爆実験が成功します。ドイツが先に降伏したため、はじめて原爆を使用する国が日本になったのです。

■まだ発見される兵士の遺体

ゼーロウの戦いを見ると、まだ戦争が終わっていないこともよくわかります。ゼーロウの戦いがあった地域では、現在でも年間200体以上の兵士の遺体が出てきます。遺骸は、紙で作られた棺に入れて埋葬されます。この発掘作業をしているのは、ドイツでは一人しかいません。国がそれを行なっているわけがありません。戦没した兵士の家族や元兵士が会員となっている NGO が、世界全体でドイツ兵士の遺体発掘作業を行なっています。

写真のように、遺骸を紙の棺に入れます。遺骸がドイツ兵のものかそうでないかは、簡単に分かるといいます。それは、ドイツ兵が個人を識別する丸いバッジを首に巻いていたからです。ただ、先に戦死した兵士のバッジを遺族に渡すために、戦死した同僚兵士のバッジも一緒に持っている兵士もいました。その時、複数のバッジが出てきた兵士の遺体の特定がとて難しくなります。その時は、兵士の所属部隊の活動地域から判断します。遺骸が共同埋葬された墓碑には、だいたい想定される命日が記されています。でも本人と確認でき、所属部隊の戦闘記録があっても、正確にいつ戦死したのかははっきりわからない場合も多くあるといいます。

遺体がソ連兵のものかドイツ兵のものは、歯型や歯の治療の跡で判断できるといい

ます。歯の治療方法が違うからです。発掘されたドイツ兵の遺骸は、この地域にある戦没者墓地に年一回まとめて埋葬されます。ソ連兵だとわかった遺骸は、ロシア大使館に引き渡されます。

こういった作業が、戦後70年経った今も続けられています。

■歴史を語る町・キュストリン

先ほどお話したキュストリンは、現在ポーランド領にあります。ポーランド名は、コストルツィンといいます。皆さんご存知の強制収容所アウシュビッツも、その呼び名はドイツ語です。ポーランド語ではオシフィエンチムといいます。キュリストンは非常に歴史のある町で、プロイセン王国の要塞でした。

プロイセン王国といえば、フリードリッヒ大王をご存知の方も多いと思います。大王は、ジャガイモが主食のドイツにジャガイモを広めた人でも有名です。大王はポツダムにあるサンサーシ宮殿で眠っていて、お墓にはよくジャガイモが供えられています。実は、大王は同性愛者でした。しかし、大王が王子の時代に、父親からイギリスの王女と結婚させられそうになりました。そのためイギリスに逃れようとしたのですが、王子は捕まってしまう、キュストリンにある城に監禁されてしまいました。その時王子は、彼を助けようとしたボーイフレンドの同性愛者が目の前で処刑されるのを目撃しなければなりませんでした。

これが、キュストリンの今の写真です。写真のように、町は第二次世界大戦で破壊されたままになっています。教会も、後でシンボリックに建てられた十字架があるだけです。次の写真は、先ほどお話したフリードリッヒ

大王が王子時代に軟禁されていた城です。その手前に、キュストリンで一番大きな広場があります。この広場では、私が訪れた2週間前にも6体の遺骸が発掘されたばかりということでした。現在も、戦争の傷跡が残っているということです。

この町が破壊されたままになっているのは、町がポーランド領にあるからです。元はドイツ領で、ドイツの歴史ある場所をポーランド人は復興しようとはしません。ポーランド人はこの旧市街の近くに、新しい町をつくりました。ただ旧要塞の周りには城壁があり、城壁のメンテナンスもしなければなりません。予算はEUから出ていますが、ポーランド人の中にはそれにも反対する人がいるということでした。

この町では、戦争がまだ終わっていないといっても過言ではありません。

■残酷な歴史を伝える施設の意義

次にまったく違う視点から、第二次世界大戦を見てみたいと思います。

この写真では、これがベルリンのブランデンブルク門です。ブランデンブルク門は、東西ドイツ統一のシンボルのような場所です。その横に、ホロコースト記念施設があります。皆さんもご存知のように、これはナチスによるユダヤ人大量虐殺を記憶するための施設です。大きな石に囲まれた狭い小道を通り抜けることで、強制収容所に収容されたユダヤ人の気持ちを感じ取ってもらおうという意図です。この施設は、ホロコーストによって大量に虐殺されたユダヤ人を記憶するためだけにつくられました。

しかし、強制収容所で虐殺されたのはユダヤ人だけではなくありません。政治犯やヨーロッ

パ大陸の少数民族で迫害されてきたシンティロマもいます。しかし、彼らはこの施設から排除されてしまいました。強制収容所では同性愛者も虐殺されていますが、同性愛者もこの施設には入れてもらえませんでした。ドイツ側はこの施設で、ホロコーストで虐殺された人たちすべてを記憶に残したいと考えました。しかし、ユダヤ人側が「うん」といいません。その結果、ユダヤ人のためだけの記念施設がつくられました。そのため、ドイツは近くにシンティロマと同性愛者のために別々に施設をつくらなければならなくなりました。

この写真がシンティロマを記憶するための施設で、これが虐殺された同性愛者を記憶するための施設です。ガラス窓を覗くと、男性同士がキスをしている写真が見えます。先ほどお話ししたホロコーストの施設から 200 メートルほど離れた場所にあります。わざわざ別々に造らなければならなかったのです。それは、今も差別が続いているということですよ。

すでにお話ししたゼーロウの戦いがあった場所には、ソ連兵を追悼し、ソ連兵を讃える施設があります。ここは元々東ドイツだった場所なので、ソ連兵の大きな像を立てて英雄視しています。その下には、ソ連兵の墓地もあります。ベルリンは、ソ連兵の侵攻によってナチスから解放されました。東ベルリンには、そのソ連兵を讃えるため、大きな施設が建てられています。それに対して、西ベルリンにはこの写真のような施設しかありません。ソ連兵があまり好かれていなかったともいえます。東西ドイツ統一後のベルリンでは、保守的な人たちの中に東ベルリンにあるソ連兵の施設を「破壊しろ、無くしてしまえ」とさえいっている人たちもいます。

■ドイツの戦争犯罪

第二次世界大戦で最も多く亡くなったのはどこの国の人か、皆さんご存知ですか？それは、ソ連の人々です。独ソ戦で亡くなった方が一番多いのです。しかし、その事実は忘れられがちです。第二次世界大戦の戦争の歴史は、ユダヤ人虐殺が中心に語られています。と同時に、ドイツの戦争犯罪はナチスドイツの犯罪だったと語り継がれています。

でも、私はそうは思いません。第三者の外国人として、ドイツ兵の多くがドイツ軍の一員としてナチスと同じように残虐な行為をやっていたらと思うています。でもそういうと、「そうじゃない!、あれはナチスの犯罪だ」と、ドイツ人からよく反論されることもあります。

ナチスの党员として虐殺に加担した人は、今もどこに身を潜めているか捜査が続けられています。今年も、アウシュビッツ（強制収容所）で経理関係の仕事をしていた 93 歳の老人が逮捕され、実刑 3 年の判決を受けました。ナチス党员であれば、今も刑事犯罪者として罰せられる。しかし、ドイツ軍兵士であれば同じように虐殺しても罰せられない。私には、どうも納得できません。

また、強制収容所にユダヤ人を運んでいたのはドイツ鉄道（旧帝国鉄道）でした。しかし、ドイツ鉄道の責任が追求されたということは聞いたことがありません。私には、戦争犯罪に関して 2 つのスタンダードがあるとは思えません。しかしドイツ人は、そうだとは決して認めません。

ドイツでは、本当に戦争について伝えられているのでしょうか。皆さんは、ドイツが戦争犯罪を解決してきた国だと思っていますらっ

しゃるかもしれません。私は本当にそうかなと、それを疑問に思っています。

■語られはじめた兵士による性犯罪

これが、戦後ドイツの分割地図です。ここが、終戦後ソ連に占領され、管轄されていた東ドイツ。これが、米・英・仏に占領分割されていた西ドイツです。そして、ベルリンだけがソ連・米・英・仏の4ヶ国に分割されていました。ソ連に分割された東ベルリンが東ドイツの首都になり、米・英・仏に管轄された西ベルリンは東ドイツに囲まれた陸の孤島となりました。先ほどお話したキュストリンはこの辺りにあり、ポツダム会談でドイツとポーランドの国境とされたオーデル・ナイセ線がここにあります。

この地域一帯が戦前のプロイセン領（ドイツの東方領土）で、ここにはたくさんのドイツ人が暮らしていました。彼らは戦後、ドイツが敗戦して本国に帰らざるを得なくなります。また、ポーランドや南のチェコスロバキア、バルト三国の一つリトアニア、ハンガリー、ルーマニア、ロシア、ユーゴスラビアなどからもドイツ人がたくさん本国に帰ってきました。ドイツ人の中には、終戦前にソ連軍が侵入してきたので怖いと感じてドイツに逃げ帰った人たちがいます。ドイツが負けてドイツ領でなくなったことから追放されたドイツ人もいます。ドイツ本国に帰還してきた人は、1,200万から1,500万人に上ります。その時、20万から210万人の人が死亡したといわれています。ただはっきりと死亡した人の数が分からないため、数字に大きな誤差が出ています。

そしてこの時、ドイツ人の女性たちは兵士から性暴力を受けました。性暴力を受けたド

イツ人女性は200万から250万人といわれ、そのうち24万人が亡くなっています。加害者のほとんどがソ連兵だと思われていました。しかし、最近になってようやくアメリカ兵やフランス兵、イギリス兵も加害者だったことが明らかになりました。この事実が大っぴらに語られるようになったのは、ほんの数年前からです。終戦時のドイツ人女性に対するこの問題をテーマにした娯楽映画が制作されたのをきっかけに、ドイツでも少しずつ当時の性暴力の問題が議論されるようになりました。数年前には、ドイツの女性研究者が当時の実態を調査し、本にまとめています。

この問題に関していえば、（戦後ドイツの）西ドイツではアメリカ兵やフランス兵、イギリス兵による性犯罪について語るのはタブーでした。それに対し東ドイツでは、ソ連兵はドイツをナチスから解放してくれたとして英雄視されていました。東ドイツでは戦後、ソ連軍が駐屯します。戦後も、駐屯したソ連兵に性暴力を受けたドイツ人女性がいきました。東ドイツでは、それでもソ連兵は英雄でした。

ソ連兵との間に、あるいはアメリカ兵やフランス兵、イギリス兵との間にできた子どももいます。東ドイツでは、そのことを公然と話すことができました。しかし西ドイツでは、それについて話すことはタブーでした。そのため、生後50年経ってようやく「お前は、アメリカ兵との間にできた子どもだ」といわれた人もいます。

■山積する戦後処理と今後の課題

東西ドイツが分割統治され、分裂していたことにも関係しますが、戦後（東西）ドイツ

には国際法上の主権がありませんでした。東西ドイツはお互いに主権のある国として認められてはいましたが、国際法上の主権はありません。そのため、東西ドイツには他国と和平条約を結ぶ権利がありませんでした。戦後賠償についても、国際法にしたがって処理することができなかったのです。戦後すぐにソ連から戦後賠償を強く求められた東ドイツでは、国内にあった線路のレールや大きな機械がすべてソ連に没収されました。一方、西ドイツはアメリカが戦後復興を強く求めたことから、皆さんもよくご存知のマーシャル・プランによって莫大な支援が行なわれました。ここにも、戦後の東西ドイツの間に大きな差がありました。

ベルリンの壁が崩壊して東西ドイツが統一される直前になってようやく、占領統治していたアメリカ、ソ連、イギリス、フランスと東西ドイツによるドイツ最終規定条約＝2プラス4（ツープラスフォー）条約が結ばれます。2は東西ドイツのこと、4はアメリカ、ソ連、イギリス、フランスのことです。ここではじめて、ドイツは国際法上の主権を獲得し、戦後を処理したことになりました。しかし、ここでドイツが話し合ったのは、ロシアとアメリカ、イギリス、フランスだけでした。（ナチスドイツの被害を受けた）他の国は、ドイツの国際法上の戦後処理に一切タッチできませんでした。そのため、最近になって金融危機に陥ったギリシャが戦後賠償をドイツに求めます。戦後70年経って、実際にはドイツの戦後賠償問題がまだ解決されていなかったことが明らかになったのです。この問題でドイツは、ギリシャ危機に対する救済資金とは別に、基金など何らかの別の形で戦後問題を処理したいとしています。

このようにたいへん複雑な問題が、まだ戦

後70年を迎える今も残っています。たとえばドイツ人が追放された問題でも、当時ドイツ人が持っていた土地や財産はどうなったのでしょうか。もちろん、返してほしい、賠償してほしいと思っている（追放された）ドイツ人がたくさんいます。でも、EU統合がこの問題をより複雑にしています。東欧諸国は、民主化後にEUに加盟します。それで、名目上解決されたことになっています。しかしEU加盟後、昔土地を所有していた（ドイツ人）持ち主が簡単に昔持っていた土地に行けるようになりました。旧所有者は土地や財産の返還を求めます。返還を請求されるポーランドやチェコは、困ってしまいます。個人が財産を返してほしいと思うのは当然です。お金を持っているドイツ人は、土地を買い戻すこともできます。そのためポーランドやチェコでは、外国人への土地の売買を制限するため、外国人への土地売買に許可制を導入せざるを得なくなりました。

このようにまだ戦後処理が終わっていない状態で、人々はどのように平和を求めているのでしょうか。また、戦後をどう処理して戦後問題を解決していけばいいのでしょうか。これは、非常に大きな問題です。

また日本と同様、ドイツの戦争体験者も高齢化して少なくなるばかりです。これから、戦争をどう伝えていけばいいのでしょうか。特にナチス時代にユダヤ人などを大量虐殺していた事実を知らず、戦争を知らない人たち、若い世代の人たちに、戦争をどのように伝えていけばいいのでしょうか。これも、非常に大きな課題になっています。ドイツは、陸続きのポーランドやチェコ、フランスとも熾烈な戦いを続けてきました。陸続きの大陸において戦争で血を流してきた隣国は、お互いにどう平和を維持していけばいいのでし

ようか。

EUの統合は、大陸において過去の戦争の歴史を乗り越えて平和を維持するための大きな枠組みだといわれます。

そのための試みについて、私が取材してきたことからいくつかの事例を紹介したいと思います。

■ドイツの戦後処理の歩み 1 - 青少年国際交流

1つは、ユダヤ人などの大量虐殺問題です。（ポーランドにある）アウシュビッツ強制収容所は1945年1月27日、ソ連軍によって解放されました。ドイツの下院である連邦議会は1996年1月、そのアウシュビッツ解放の日（1月27日）を「国家社会主義犠牲者追悼の日」と定め、それ以来毎年大きな式典を開催しています。またそれを機に、若者たちにその記憶を伝えて議論するための「青少年国際交流」を行なうことも決めました。隣国のポーランドなど様々な国から若者を集め、ドイツの若者と一緒にアウシュビッツ強制収容所跡などを訪問します。

アウシュビッツ解放から70年を迎える今年1月、私はその青少年国際交流取材してきました。今回は総勢78人（ドイツ50名、ポーランド6名、フランス6名、ロシア4名、ベルラーシ2名、ウクライナ2名、イタリア1名、イスラエル1名、アメリカ1名、オーストリア1名など）、16歳から26歳の若者が集まりました。ドイツでは18歳で成人になるので、親の許可がなくても参加できます。そのため、参加者の年齢が比較的高くなっています。彼らを6つのグループに分け、グループ毎にドイツ人とポーランド人が一緒になるようにします。若者たちは、（連邦議会での）式典を前にアウシュビッツを訪れ

ました。

1月23日にアウシュビッツに入り、アウシュビッツ強制収容所のあったオシフィエンチムの町を見学します。当時ユダヤ人社会がどういうものだったかを見て回りました。翌24日はアウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所跡を見学、さらに25日はアウシュビッツ近くにあるクラクフで歴史博物館（元シンドラーの工場）と（ユダヤ人が強制的に集められた）ゲットー内にある薬局を見学しました。

『シンドラーのリスト』という映画をご覧になった方も多いと思います。ホーロー鍋などをつくる工場を経営していたドイツ人実業家オスカー・シンドラーが、その工場でユダヤ人たちを助けました。ゲットーでも、薬局を営むポーランド人がユダヤ人を助けていたことがわかっています。1日目はナチスドイツの虐殺の歴史について知り、2日目は勇気を出してユダヤ人を助けた市民がいたことを知ってもらいます。最終日には、アウシュビッツ強制収容所に収容されていたポーランド人女性の体験談を聞きました。毎日その日の日程が終わる毎に、グループ毎にディスカッションの時間を設け、異なる国の若者たちがその日に見て感じたことを議論します。国によって歴史の見方が異なることが明らかになってきたといえます。

この写真は、（国際交流に参加した）若者たちがアウシュビッツ強制収容所跡内を歩いている様子です。建物の中には展示室があり、たとえばユダヤ人からとった髪の毛や歯を抜いて集めた金歯などが並べてあります。この先にはガス室があります。収容されていた人たちが射殺された「死の壁」の前で、若者たちは一緒に黙祷を捧げました。これは、若者たちを案内したガイドさんの写真です。

ガイドさんは、ドイツ語で説明していました。

ドイツにも、強制収容所がたくさんありました。それは今博物館となっており、1990年代中頃から国内にある強制収容所跡では若者たちが過去の歴史について研修できるように収容所跡の一番近くにあるユースホステルなどが研修施設に変えられていきました。その施設の館長さんたちが、それぞれグループを引率しています。

この写真が、先ほどいった歴史博物館となっているシンドラの工場です。この写真は、当時のクラクフの中心にあった広場の写真です。当時の様子がよくわると思います。広場に描かれた「V」は「VICTORY」の「V」を意味し、その先に処刑場があります。当時、町のど真ん中にこんなものがあったのです。

■若い世代が築く新たな関係

私は戦争加害国の日本人なので、戦争加害国のドイツ人の若者と被害国のポーランド人の若者がどう思っているのか一緒にインタビューしたくなりました。これからそのVTRをお見せします。左がドイツ、右がポーランドの若者です。ドイツ語なので何を話しているか分からないと思いますが、二人の表情から感じ取れることがあると思います。

——インタビュー映像——

このインタビュー映像は、ゲットーの薬局前で撮影しました。その前に、シンドラの工場の前でも二人をインタビューしていました。そのすぐ後に、ポーランド人のマティアスが「なぜ僕たちを被害国と加害国の若者として分けるのか？」と、私に聞いてきまし

た。彼は「今の世代の僕たちには、そんなことは関係ないよ」といいます。私はそういわれて、ハッとしました。確かにそうだと思い、もう一度話を聞きたくなって二人にインタビューしました。それが、このVTRです。

マティアスは「今の若者は、もう見方が違う。パースペクティブが違う」といいます。「今、ポーランドとドイツの若い世代は仲がいいのだから、僕らが協力し合い、仲のいい所を土台に両国関係を築いていけばいい。むしろ、過去の暗い歴史が今の協力関係を崩してしまうほうがおかしい」といいます。さらに、「ドイツ人がホロコーストの歴史をすることと、ポーランド人がホロコーストの歴史を見ることに、違いがあることがわかった。でもそこに違いがあっても、むしろそれをお互いに尊重すべきだと思う」といいました。ドイツ人の若者は、「人間はみんな同じ。国籍、人種が違って同じなんだ。今の若い世代は過去の歴史を知っているし、そこから学んでもいるはずだ。だから、人間はみんな同じということをベースに付き合っている。今の若い世代がどういう関係にあるのかのほうが大切だ。お互いの見方の違いを知ることは大切だし、それを尊重することも大切だ。そこに、新しい世代が協力し合い、平和を求めていくベースがある」といいます。

■ドイツの戦後処理の歩み2 - 戦争体験者による和解の試み

次に、私も非常に驚かされた事例です。

2006年、私は広島からの被爆者と一緒に（ドイツ）ドレスデンの空襲体験者と交流するために、ドレスデンを訪ねていました。ドレスデンは大空襲を受けたところで、東京大空襲よりも多くの爆弾が投下されました。そ

の時、ドレスデンの空襲生存者がナチスドイツが空爆した都市の生存者と和解するために交流していることを知らされました。それを聞いて私は、こんなことができるのかとびっくりしました。

この写真の左がゾフィア・ブルハチンスカさん（83歳）、右がノーラ・ランクさん（83歳）です。ゾフィアさんは1939年9月1日、ポーランド南西部にある人口1万6,000人の小さな村・ヴィエルニで空襲を体験し、兄を亡くしてしまいました。産業も何もない農村で、交通の拠点もなく、軍事的に何も意味のない小さな村が早朝4時40分、突如ドイツ空軍の空爆を受けました。ノーラさんは、1945年2月13日から15日の間にドレスデンで4回の空襲を体験しました。最初の2回はイギリス軍、後の2回はアメリカ軍によるものです。最近の調査では、2万5,000人が亡くなったことがわかっています。ノーラさんは、空爆がはじまってすぐに防空壕に避難します。しかし「防空壕は逆に危ない」と感じ、すぐに防空壕から出たことが幸いして助かりました。

二人の写真を撮影したのは、ドレスデン空襲の犠牲者が埋葬されている墓地です。この奥に、無名戦没者が埋葬されている共同墓地と慰霊碑があります。慰霊碑から少し離れたところには、円形広場があります。これが円形広場から慰霊碑を撮った写真で、ドレスデンが空襲された日と同じ今年の2月13日に撮影したものです。

私は、慰霊碑よりもこの円形広場に驚きました。慰霊碑を正面に見て、右側に7本、左側に7本の柱が立っています。右側の柱には「アウシュビッツ、ベルゲン・ベルゼン、トレージエンシュタット」など、強制収容所の名前が刻まれています。左側の柱には「レニ

ングラード、アムステルダム、コヴェントリー、ワルシャワ」など、ドイツが空爆した町の名前が記されています。

この写真にあるリーディッツェは、チェコのプラハ近くにある小さな村です。1942年5月プラハでナチスの親衛隊幹部がレジスタンス運動の人々に暗殺されたことに報復するため、消滅させられてしまった村です。15歳以上の男性はすべて殺され、女性と子どもは強制収容所に送られました。アーリア系の顔をした子ども13人だけがドイツ人の養子になるためにドイツに連れて行かれ、リーディッツェは完全に消滅してしまいました。終戦後、すぐ横に新しい村が建設されますが、一つの村がナチスの暴力によって完全に消滅させられてしまったのです。

■ノーラとゾフィア、二人の出会い

では、二人はどのようにして知り合ったのでしょうか。

これまで「第二次世界大戦は、1939年9月1日午前4時45分にドイツ海軍がダンツィヒ（ポーランド語名、グダニスク）を襲撃することによってはじまった」とされてきました。しかしヴィエルニは、それよりも早い午前4時40分に空爆されていました。2003年にドイツのジャーナリストが「ダンツィヒよりも5分早くヴィエルニは攻撃されていた」とテレビで報道します。それを見ていたノーラさんはすぐに、「生存者はいないのかしら。いるなら会いたい」とテレビ局に問い合わせます。生存者がいることを知ると、ノーラさんはすぐに生存者に会いたいとヴィエルニに行きました。

そのヴィエルニの生存者が、ゾフィアさんでした。ゾフィアさんは、兄を殺したドイツ

人には会いたいとは思えませんでした。でもノーラさんに会ってみて、はじめてドイツ人の誰もが悪いわけではないことを知りました。こうして、ドレスデンとヴィエルニの生存者の交流がはじまります。ゾフィアさんは、ノーラさんの暮らすドレスデンにもう何回も訪れています。ゾフィアさんは交流するにつれ、戦争の過去の重みから解放され、気持ち軽くなっていくのを感じたと語ります。

ノーラさんをはじめドレスデンの空襲体験者がドイツが空爆した町の空襲体験者と交流をはじめるとききっかけになったのは、スペインのゲルニカでした。

皆さん、ピカソの『ゲルニカ』という作品をご存知だと思います。この作品の土台になったのが、1937年4月26日、第二次世界大戦のはじまる前にナチスドイツがフランコ反乱軍を支援するために行ったゲルニカ空爆です。空爆では、1,700人が亡くなっています。第二次世界大戦においてまったく罪のない市民を殺害する都市無差別攻撃の前例となった空爆でした。そのゲルニカから、ドレスデンの空襲体験者にゲルニカの空襲体験者と交流しませんかとの申し入れがありました。

戦後、スペインではフランコの独裁がはじまり、ゲルニカのあるフランス国境沿いのバスク地方やカタルーニャ地方の市民が弾圧されました。カタルーニャ地方には、皆さんもご存知のバルセロナがあります。テロ組織・ETAがテロ活動を行なうなど、市民は戦後、様々な紛争や暴力に苦しんできました。

ゲルニカでは1990年代に入り、戦争の被害者意識やスペインへの憎悪を持ったまま生き続けるのではなく、どうすれば平和を維

持し続けることができるのか、平和に貢献できるのか、「平和文化を築こう」という意識が芽生えてきます。私が聞いたところでは、この意識改革の基盤にはピカソの『ゲルニカ』の影響が強くあったということです。犠牲者を追悼するための戦争や暴力の記憶を、平和への貢献に変えていこう。そのプロセスの中で、ゲルニカにできた平和研究所の所長さんが1999年、ドレスデンの空襲体験者に「ゲルニカにきて交流しませんか」と声をかけます。しかしドレスデンの空襲体験者は、ナチスドイツが空爆した所に行っていないものか。行ったとしても、どう受け止められるだろうかと、とても不安でした。誰も行こうという体験者ができません。ノーラさんだけが、行こうと手を挙げました。

こうしてノーラさんたちは、和解のためにドイツが空爆した都市の空襲体験者と交流をはじめることになりました。ノーラさんはゲルニカを訪れた時、「ドイツがゲルニカを無差別空爆した方法が、そのままドレスデンで使われていた」と感じました。

■ゲルニカの人々の思い

ゲルニカの市民は、どうしてそういう意識改革ができたのでしょうか。

平和研究センターのアンドレアス・シェフターさん（ドイツ人）は「手の届かない世界平和を考えるのではなく、自分たちの身の回りの平和を考える。そういう意識改革がしたかった。自分たちの生活に密着した平和を考えることは、地元の歴史や生活文化を基盤にした平和を築くことだ」といいました。

ノーラさんたちはゲルニカだけでなく、イギリスのコヴェントリーや先に述べたチェコのリーディッツェの戦争体験者たちとも

交流を重ねていきます。リーディッツェの襲撃後、ドイツへ養子として連れていかれた子どものうちの2人（男性1人と女性1人）が、ドレスデンで空襲に遭っています。そのリーディッツェに行かないかといわれたノーラさんは、「残酷さが違いすぎる」とはじめは躊躇しました。でも、ノーラさんは行く決心をしました。その時、男性のほうはノーラさんに会おうとはしませんでした。しかし、次にドレスデン空襲体験者のグループがリーディッツェを訪れた時、男性もドレスデンのグループに会ってくれました。それをきっかけにこの男性は今、ドレスデンの学校などで若者を前に自分の戦争体験を語っています。

■自分個人の平和の証

平和な時代に暮らしていると、平和のありがたさがわかりません。平和って何だろう、平和はなぜ大切なのか、平和が当たり前の社会で、その大切さが感じられなくなっています。だからこそ、ゲルニカのようにマクロ的な大きな平和からマイクロ的な小さな平和へ意識改革するのは、自分の生活の中で平和の大切さを感じていく試みです。「自分の身の回りに、どんな平和があるのか?」。それが、今年のドレスデンの空襲の日にドレスデンの空襲体験者と若者が一緒に掲げたテーマでした。

この写真は、ゲルニカからきたアンドレア・シェフターさん。ゲルニカでは、オークの木が自治の象徴となっています。シェフターさんは、オークの葉をガラスに入れて作ったガラス細工を平和の証として持ってきました。ゾフィアさんが持っているのは、ヴィエルニ空爆で破壊された教会の基礎の破片です。ノーラさんは、ドレスデンの空襲で亡

くなったたくさんの人たちが眠る墓地を包む緑、その自然の象徴として小さな植木を平和の証として持ってきました。

ドレスデンでは2月13日に、それぞれが「身の回りの平和を見つけよう」と自分の平和の証を持って集まりました。コヴェントリーやゲルニカの他、世界中の町から平和運動を続ける人たちが、壇上で自分の平和の証を紹介しました。

■生活の中で平和を考える

このようにドイツでは、マイクロ的な小さな平和について考えようとするグループや自治体がいくつも出てきました。テーマは、いろいろあります。たとえば、アフガンに派兵されたドイツ軍兵士に危険はないのか。そして、その家族はどう思うのだろうか。ドイツでは、社会が極右化する傾向も出ています。人種差別や難民受け入れなどで外国人や難民施設が襲撃されるなどの事件が次々と起こっています。また、歴史の改ざんや社会の格差の問題など、自分たちの生活の周りにもたくさん問題があります。

大きな世界の歴史でなくても、土地それぞれに歴史があります。その小さな歴史は、町にどのような影響を与えてきたのでしょうか。身近なところでは、福島の問題。幕末の会津若松藩は最後の最後まで江戸幕府を擁護しました。それが今、福島県にたくさん原発があることに影響を与えていないのでしょうか。第二次世界大戦中、京都を原爆投下の標的にしたくないと努力したのはアメリカの陸軍大臣スティムソンでした。その京都にはたくさんのお寺があります。僧侶は第二次世界大戦当時、戦争に対してどう対応していたのでしょうか。戦地に派遣された僧侶は

銃を持って敵の兵士を殺したのでしょうか。それとも、単に宗教者として従軍僧侶の役割を果たしていたのでしょうか。もし、僧侶が銃を持って戦っていたら、それは宗教者として許されたのでしょうか。

このように、みなさんの生活する場や学業に密着したところにおいていろいろと平和について考えることができると思います。

■ドイツ・ケムニッツにおける平和

ドイツ南東部にある小さな町・ケムニッツでは、ネオナチなど極右グループが増えていろいろな問題が起こっています。そこで、市民のイニシアチブで子どもたちや青少年たちと一緒に写真のような垂れ幕（バナー）を制作するプロジェクトをはじめました。町は、ドイツ降伏直前の1945年5月5日に空爆されました。その日を「平和の日」として、子どもたちと青少年たちが極右グループに対してどう対応すればいいのか、戦争に対してどう考えればいいのかといったことをテーマにして話し合い、グループ毎にバナーを造ります。それを写真のように、市庁舎の周りに貼り付けます。

これら一つ一つのモチーフを考えてバナーを共同で制作するために、こどもたちみんなでディスカッションを重ねます。そのプロセスには、非常に大切な教育的な意味があります。地元の政界ばかりでなく、経済界も協力し、バナーはケムニッツのデパートやショッピングモールでも展示されます。それが、町の活性化にもつながっています。

写真は、市庁舎前の広場で子どもたちが大人の市民と一緒に極右化の問題と戦争と平和をテーマにして、それぞれが思い付いたモチーフを描いているところです。広場には、

みんなで造った作品が展示されます。この他にも、写真のように市内の道路を通行止めにして、子どもたちが造った作品を道路に展示します。

この写真は、ドイツ人芸術家グンター・デニムヒがはじめた「Stolperstein = つまづきの石」です。石は真鍮製で、表面に強制収容所に強制的に連れて行かれたユダヤ人の名前、日付が記載されています。石は、そのユダヤ人が住んでいた家の前の歩道に埋め込まれます。デニムヒ自身が住所と氏名などを調べ、ドイツばかりでなく、ヨーロッパ中約500箇所に石が埋め込まれています。5月8日のドイツ終戦記念日には、住民がこの石を磨いて、石の前にロウソクを立てたりする光景も見られます。

これは、ユダヤ人大量虐殺というドイツの過去を今も日常化している事例だと言えます。

■私にとっての「平和」

最後に、私個人の「平和」についてお話ししたいと思います。

皆さんは、ポツダム会談と原爆投下が関係があると思っていらっしゃるかもしれません。そう学校で習っているかもしれません。しかしポツダム宣言は、ポツダム会談でつくられたものではありません。ポツダム会談は、あくまでもドイツの戦後処理をするため、その方法について審議するために行われました。トルーマン大統領（アメリカ）とチャーチル首相（イギリス）、スターリン（ソ連）がポツダムに集まり、1945年7月後半から8月初めにかけて審議されていました。その間の7月26日、アメリカ、イギリス、中華民国の3カ国の共同声明としてポツダム宣言が発

表されました。しかしその時、宣言には蒋介石の署名もチャーチルの署名もありませんでした。選挙に負けたチャーチルはすでにポツダムを離れてイギリスに帰国していました。蒋介石は元々ポツダムにはきていません。ポツダム宣言の内容はトルーマン大統領が一人で決めて、米国のメディアに発表されました。

ここで注目したいのは、原爆投下の命令書がその前日の7月25日にワシントンから作戦担当司令官に出されていたことです。命令書には「アトミック・ボンブス」と複数形で記され、候補地として広島、小倉、長崎、新潟などが挙げられていました。命令書の下には、「この命令者は、スティムソンとマーシャルの指示によって出された」と記されています。この二人はその時、ポツダムにあるこの写真の邸宅にいました。これは、ポツダム会談時に米国トルーマン大統領が滞在していた建物です。この建物から原爆投下の最終命令が出されたと見られます。

その歴史を知ったポツダム市民有志が、邸宅の前にあった名前のない広場を「ヒロシマ広場」にしよう、広場に記念碑をつくろうと立ち上がり、ポツダム市議会に提案して決議されました。その後に、私もこのプロジェクトに関わりました。

記念碑には、長崎から当時山王神社で被爆した石と、広島からは被爆した市内電車（広電）の敷石が埋め込まれています。広電の敷石は、戦後新しい敷石を入れていないということで、広島にある市電の敷石はすべて被爆しています。長崎にも市内電車が走っていますが、戦後に新しい敷石を入れたため、どれが当時被爆した敷石か識別できません。長崎ではみなさんからいろいろご協力いただいて、片足鳥居で有名な山王神社の境内に当時

被爆した石がごろがっていることがわかり、その石を頂きました。

現在、この広場は「ヒロシマ・ナガサキ広場」と改名されています。碑文には「1945年8月6日、9日に広島と長崎に投下された原爆によって犠牲となった人々を追悼して---- 連合国によるポツダム会談が1945年7月17日～8月2日まで行われ、その間アメリカのハリー・S・トルーマン大統領が正面にある邸宅に滞在していた。1945年7月25日、アメリカ大統領同意のもとワシントンから軍の原爆投下命令が出された。原爆の破壊力は数十万人の人々を死に追いやり人々に計り知れない苦しみをもたらした。核兵器のない世界を願って」と書かれています。

今から思うと、ポツダムだったからこういうことができたと思います。もしこの邸宅がドイツの首都ベルリンにあったとしたら、政治的な圧力で実現できなかったと思います。私たちは、アメリカに平手打ちくらいはくらわしたかなという気持ちでいます。

■日常生活に生きづく平和

このプロジェクトは、単に原爆犠牲者を追悼するためのものではありません。記念碑として町の一角に大きな石を置くことで、その区域の雰囲気が変わります。市民が日常生活の中で、この区域を通る毎に石を目にします。その時、記念碑のことを考えます。記念碑のすぐ近くにはイタリアのアイスクリーム屋さんがあり、アイスクリームを買った子どもたちがこの広場で遊んだりしています。少しずつ記念碑が日常の一つとして生活に入り込んできました。

この邸宅は今、リベラル系自民党の財団のものになっています。財団は、最初から最後

まで記念碑の設置に反対してきました。そして、今もまだ反対しています。しかし、広場は市民の憩いの場となり、財団の職員も昼休みにそこで食事をとったり、休憩したりしています。

平和に関するものが町の一角にできたことで、この場所が変わっていくのです。最初は、一部のポツダム市民有志が考えたアイデアでした。しかし今は、周辺の住民たちから広場で平和に関して定期的に催し物をしてほしいと依頼されるようになりました。こうして場所ばかりでなく、市民も変わってきたのです。

今年の7月25日（原爆投下命令が下された日）には、邸宅の後ろにある大きな湖で灯籠流しを行いました。周辺の市民からは、灯籠流しをずっと続けて欲しいといわれています。原爆投下を単に悲劇の記録とするのではなく、その記録が市民の生活の一部として身近な平和の証になってきたのです。

こういうことが、とても大切なことだと思います。これを私の最後のことにさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

【質疑応答】

質問 特に前半は初めてお聞きするお話が多く、自分の無知に驚くばかりで、何も知らされていないし、知ろうともしない現実を思い知らされました。後半は、ゾッとするような経験をドイツでされた方々ですら多くのことを、ご存知ないのかもしれませんが、自

分の経験から知ろうとする努力を始められたことがとても印象に残りました。貴重なことを教えて頂いたと思います。その上で、過去を振り返り、何ができるのかを改めて考えさせられました。

先ほど市庁舎にかけられたバナーの写真を見ましたが、それぞれドイツ語で何と書かれていたのでしょうか？また、日本語で書かれたバナーがあったと思いますが、在住の日本人の子どもたちが書かれたのでしょうか？

ふくもと 日本人の子どもたちが書いたものではないと思います。写真をもう一度見てみましょう。「動物と分かち合う心、お互いを理解し合う、世界平和を願う」と書いてあります。日本語はおそらく日本語を勉強している現地の子どもたちが書いたと思いますが、また確認しておきます。

今のお話をお聞きしていて思ったのですが、ドレスデンの空襲体験者の方々はかなり高齢です。それに対して、空襲体験者のお話を聞く者は戦争を知らない若い世代が大半です。でも、高齢の体験者と戦争を知らない若い世代と一緒に戦争について、平和について考えると、自分たちにも変化があったと、空襲体験者の方たちがおっしゃっています。どんなに高齢であろうと、人間は考えることで変わることができる。これもまた、非常に印象的で、素晴らしいことだと思いました。

司会 ありがとうございました。

(2015年8月1日)